

ケアマネだから できること



～地域とつなぐ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

* これまでは、ケアマネの出会った家族たちと題して執筆してきました。今回の11号からは、少し角度を変えて連載を続けようと思いました。ケアマネと家族、のみならず、地域、人、制度・・・等々、ケアマネだからできること、できたことをお伝えしていきます。

～「連携」という言葉の疑問～

ケアマネとして仕事をしていると、「連携」という言葉をよく聞きます。連携の名のもとに、専門職同志がつながりあうことは悪いことではないし、援助対象者を中心にケアチームが一丸となることは好ましいことに違いありません。けれども私は、この「連携」という言葉に少々疑問を持っています。

例えば、介護保険サービスの利用者が、ケアマネをはじめとして、サービスを提供する専門職との関係が深くなっていったとしても、その人の「生活者」の部分は、きちんと「生活の場」につなが

っていているだろうか。「生活の場」、つまり「地域」のこと。

私は、介護を必要とする人の担当になると、それまであれこれ心配していた近隣住民が「ケアマネさんがいるから」という理由で、それ以後のつながりが希薄になっていく、という現象を幾度となく感じたことがあります。それは、本末転倒な話です。介護の社会化を謳った介護保険制度ではあるけれど、所詮、制度で賄えることなどしている、と思うし、制度になったサービスのあれこれ、制約も多い。本当に私たちが暮らしの中に求めるような柔軟な対応は難しいのが現状です。例え、なんらかの公的サービスが必要となったとしても、地域住民同志のつながりが希薄にならないようにしていかなければならないと感じます。そして、ともすれば「もう自分などなんの役にもたたないから。」と、地域と疎遠になっていく高齢者自身にもエンパワメントしつつ、その人の持っている力を生かし続ける場所を見つけ出していく

ことも、ケアマネに求められる役割ではないかと思っています。

「連携」という言葉が、専門職同志や、専門職とサービス利用者だけにとどまらず、利用者と地域にも広げられるように意識して、日々の仕事を展開したいと思っています。そして、そのためには、個別ニーズが地域にとってどのような意味を持っているのか、地域で共有していけるような動きが必要です。

とは言っても、個人の問題を地域で共有することには、壁もあります。そんな壁をどんな風乗り越えながら地域支援をしていけるのか、日々考えあぐねていることも含めながら、「ケアマネだからできること」をお伝えしたいと思います。

ある日の相談内容

80歳 女性Aさん 独居

この数カ月体調不良があって、短期間の入院を幾度となく繰り返している。外出も減っているようだ。入院の際は救急車を呼んでいる。そろそろ一人暮らしも何かと大変ではないのか。「介護の人に相談したらいいよ。」と近所の人Bさんが本人へ話をし、近所の人から介護の相談の電話があった。

ケアマネは、相談の電話を受け、この女性Aさん宅を訪問することにした。古い住宅街の中に公営住宅も交じっていた。Aさんは、この公営住宅に一人で住んでいるようだ。

訪問し呼び鈴を鳴らすと、かなり時間がかかって、Aさんが玄関ドアを開けてくれた。

「近所のBさんからのご紹介で伺いました。」と声をかけると、「ああ、聞いているよ。汚けれど、まずは、あがってください。」そう笑顔で部屋の中へ招き入れてくれた。

Aさんの部屋は手狭になっていた。散らかって

いる、というよりは、本来の部屋の大きさに対して荷物が多すぎるような印象だ。家具の合間にできたわずかばかりのスペースに「さあ座ってください。」と座布団を勧めてくれる。

「お一人暮らしは、いつ頃からですか？」ケアマネが尋ねると、「もう20年以上もたつね。町の中で店をしていたけれど、主人が亡くなってから、店も閉めてここにやり住んだのですよ。元は、大きな一軒家に住んでいたからね、荷物がね、収まらなくて。」と部屋の中を見渡ししながら言う。「そうでしたか……。ところで、Aさんは、このところお体の調子が優れないとお聞きしました。いかがですか。」Aさんが話をする時には、常にここにこしている。「いやあ、もう年だから。80も過ぎていし、あっちこちね。」話しぶりからは、深刻な様子はない。ケアマネは、Aさんの普段の暮らしの中で、何か介護サービスが役に立てることはないか、介護サービスの説明をしながら、あれこれとAさんの暮らしぶりを聞いた。Aさんは、「私は困ってないよ。今までの通り生活は続けて行けるから、大丈夫ですよ。この間は、近所のBさんが、心配して声をかけてくれたけれど、私は大丈夫だから、もう来てくれなくていいですよ。」そんな風に話は終わった。本人が困難を感じていず、サービスも希望しないとはっきりと意思表示されては、あまり無理にサービスの話をして、と思い、初回の訪問はこのあたりでと終了した。けれども、台所に重ねられた食器の山や、テーブルに出し放しになった古くなった食べ物。玄関に置かれた幾つものゴミ袋。ケアマネは、ご本人の話とは別に、なんらかの支援の必要性を感じていた。きっと、この様子を近所の人も心配しているのだろう。

「今日のところは失礼します。時々、近くに寄った時にお声をかけさせていただいてもよいでしょうか。」とケアマネが声をかけると、Aさんは「散らかっていますけどね。こんなところで良かった

ら、どうぞ来てください。」話好きなAさんの好意とも感じられた。

Aさんの家の玄関を閉め、止めてあった車に乗り込もうとした時です。

「あの、Aさんのところに来てくれる介護の人ですか？」と声をかけてきた女性がいる。

ケアマネがちょっと会釈をすると、その女性は近づいてきて「最近ね、Aさんの様子がおかしいのですよ。もう一人暮らしは無理かもしれないね、とみんなで言っていたところですよ。」と話す。ここで、立ち話でAさんの話をするというのは、ケアマネとしての守秘義務に反する行為だ。ケアマネは、その女性に向かって「あの、どちらにお住まいでいらっしゃいますか。」と尋ねた。女性は、あそこだよ、と指さして自分の家を教えてくれた。何か聞いたら色々教えてくれそうだなとは思いつつ、「このあたりを時々回らせていただいておりますので、これからもよろしくお願いします。」そんな曖昧なあいさつで話を切り上げた。

さて、事務所に戻って今日のAさんとのやりとり、Aさんの生活状況、近隣住民の声を思い返してみた。Aさんは大丈夫、とは言っていたけれど、やはり何らかの支援を要する状況だろう、と感じる。もう少し、Aさんのことをしっかり理解しよう。そして、Aさんにとって必要な支援を考えていくこととした。

2度目の訪問

物忘れもあるようだというAさんのところには、翌週2度目の訪問をした。幸いAさんは、ケアマネのことを覚えていた。訪問すると、抵抗なくケアマネを家に招き入れてくれる。その日は、Aさんが日ごろどんな風に過ごしているか、日課を聞いてみた。Aさんの話だと、午前中に買い物へ行ったり、午後は散歩をしたりしているということだった。毎日何かしらの用事で外へ出るから、近所の人と顔を合わせるし挨拶もしているという。

特に、角の家の人には何かと世話になっていると話していた。角の家？前回、ケアマネが訪問した帰りに話しかけてきた女性の家だ。どんな付き合いなのだろう。聞くと、以前Aさんが飼っていた犬を、預けたという。Aさんは、ほぼ毎日犬の様子を見にその女性の家に行くという。ケアマネは「Aさんの犬を私に見せていただけませんか。」と聞いてみた。すると、Aさんは「いいよ。」と返事をしてくれ、その女性の家まで二人で行くことにした。

呼び鈴を鳴らすと、先日会ったその女性も気さくに玄関を開けてくれた。Aさんのことは「おばさん」と呼んでいる。ケアマネはその女性に「Aさんの犬を見せていただきたいなと思って一緒に来ました。」と挨拶すると、その女性は、どうぞ、どうぞと部屋に入れてくれた。小さな室内犬が元気にAさんのそばに寄ってくる。「もう、預かって4年になるね。・・・ところで、おばさん、介護の人に何か相談しているの？」女性がAさんに声をかけた。Aさんは「別にね、お世話になることもないと思っているのだけれどね。」

その女性は、今度はケアマネに向かって話始めた。Aさんが長く一人で暮らしてきたこと、最近は体調をよく崩すこと、傍からみていると心配がたくさんある。介護のサービスを受けてなんとか安心して暮らせないものか。Aさんは、その話が聞こえているのか聞こえていないのか、知らぬ顔で犬をなでている。Aさんに、この女性が心配してくれていることを、聞いてみた。Aさんは、「本当に心配してもらってありがたいけど、私は大丈夫だから。」考えは変わらないようだ。その言葉を聞いて女性はややあきれ顔をしていた。帰り際にケアマネはその女性に名刺を渡した。そして、Aさんにも犬を見せてくれたお礼を言って別れた。

ケアマネが事務所へ戻ると見ていたかのようなタイミングで、先ほどの女性から電話があった。やはりAさんのことだった。物忘れ、ゴミ捨てが

できない、時々訪ねると鍋を焦がしていることもある。物が見当たらないと、近所の人を疑ってしまうことが増えて、近所の人もAさんとの付き合いを徐々に遠のけてしまっている。なんとかならないだろうか、ということだった。

地域の中のAさん

3回目の訪問は、夕方の時間。この時間、この住宅の人は大抵庭に出ている。家庭菜園の手入れをしている人が多い。Aさんの自宅の呼び鈴を鳴らしても応答がない。庭に回ってみるとAさんが隣の人と話をしている。挨拶すると、隣の方はケアマネに向かって「どなたですか。」と聞く。ケアマネはAさんに「私のことを紹介してください。」と言うと、Aさんは「介護の人だよ。何も世話にはなっていないのだけれどね。」と言って紹介してくれた。隣の方は、ケアマネのそばに寄ってきて「ちょっと困ったことがありますね。」と言う。どうやら、Aさんは、自覚とは別に随分と近所の人に心配された生活となっていたようです。Aさんの行動が近所の人を遠ざけ、少しずつ孤立しているようでした。このままでは、一人暮らしの継続も心配になっていきます。

ケアマネがAさんのところへ足を運ぶたびに、角の女性が気にかけてくれていました。この3度目の訪問時にもケアマネの姿を見つけると、「ケアマネさん、おばさん、ちょっとお茶を飲みに来ない。」と声をかけて家に入れてくれました。女性は「おばさん、みんな心配しているよ。ゴミを捨てることは私も手伝えるけれど、買い物も大変そうだし、ご飯作ったり掃除したりも、手伝ってもらったらいけない。」と切り出してくれた。Aさんは、「そんなに言うなら、少し手伝ってもらおうか。」と渋々サービス利用を決めた。

その後、サービス利用が開始すると、近所の方は、サービスに入るスタッフを見つけては、Aさんの様子を気にかけて声をかけてくれた。時折の

不協和音はあるものの、近所の人も、Aさんに介護サービスが入ることで、何かあった時には、サービススタッフやケアマネに声をかければ良いという「安心」が生まれたのでしょうか。「Aさんのことで困ったことがあるのですよ。」そんな電話のやり取りが時々ありながら、それでもなんとかAさんの一人暮らしは続いています。

それぞれの「安心」

一人暮らしの高齢者は、近隣住民から心配されます。一人暮らしの本人はその心配を不要と言います。どちらにも言い分はあるだろうと思います。近隣の人に心配や気が向かないような世の中では少々寂しい気がします。一方自分でまだまだやれる、と思っている段階での周囲の心配は、鬱陶しいものでもあるでしょう。そんな互いの思いを共有するところから、助け合い、や、お互い様という気持ちが生まれるのではないのでしょうか。そして、一般地域住民は、自分の身近で「何か」起こった時にどうしたらよいのか、そんな不安があるものです。どんな人にも「何か」起こる可能性は等しくあります。何か起こった時の責任問題が心配で、ちょっと心配が多くなってきた人を排除する世の中は実に暮らしにくいものではないでしょうか。私たち、専門職はそんな時に役割を發揮しなくてはならないと思います。「心配なことは連絡をください。」そう言って渡す一枚の名刺が、「お互い様」の時間を支えているのかもしれない。何かがあったら一緒に考えていく。その積み重ねが、地域の力になっていくと思います。

ケアマネは業務の中でよく地域を歩きまわります。支援を必要とする人の24時間が、どのような環境の中に置かれているのか、環境をアセスメントすること、その業務特性「足」を使った仕事成せる技だと感じます。

*紹介する事例はプライバシーに配慮し、事実を一部加工しています。